

国内初の河川縁組マンモス

まず、飯泉嘉門徳島県知事が「兄弟縁組を契機に、三大河川が育んできた流域の富、文化、産業を融合し、3倍と言わず3乗の効果を発信していただきたい。そして、皆さんが歩く広告塔となり、長く語り継いでいってほしい」と開会挨拶を行いました。その後、縁組の発案者である「吉野川渡し研究会」の日下武久事務局長がこれまでの経緯を説明。公益社団法人日本河川協会の虫明功臣会長は「流域の活動のネットワーク化や活性化に繋がる」と縁組の意義を語りました。そして、関係者が見守るなか、利根川流域交流会の福成孝三会長、NPO法人筑後川流域連携倶楽部の駄田井正理事、吉野川交流推進会議の福永義和会長が、それぞれ協定書に署名し、ここ在国内初となる河川同士による兄弟縁組が締結されました。



珍しい水色のだるま。これも国内初かもしれませんね

その後、縁組締結を祝って、また、今後の発展を誓って、だるまに「目入れ」を行いました。このだるまは、利根川流域の群馬県高崎市で製作されたもので、「創造」し、「縁」を広げ、「絆」を高めていこうという意味で、それぞれ3つの文字が記されています。

目入れの最中、互いのだるまの目を見比べて、「やっぱり太郎が一番大きいな」と談笑する場面も。平成17年から7年わたる交流の歴史がふと感じられる瞬間でした。

熱気と活気いっぱい。川のワークショップ

29日に開催された「川のワークショップ」も大盛況でした。三河川の流域で活動する13団体が参加し、活動状況の発表、意見交換を行いました。「太郎賞」「次郎賞」「三郎賞」が選ばれるとあって、発表する方も聞く方も熱が入ります。三河川の代表者による選考の結果、筑後川水系で景観を生かした町おこしに



川の特徴を生かしたそれぞれの活動に聞き入る参加者



2時間にわたった川のワークショップ。互いの活動に生かそうと真剣な意見交換が行われました

取り組む千年あかり実行委員会に「太郎賞」、吉野川中流域でカヌーなどの体験型教育を通して地域活性化を目指すA M E B O に「次郎賞」が、そして「三郎賞」は利根川水系で昔ながらの河川工法による「魚の駅」作りに取り組む河内自然環境研究会に贈られました。

ワークショップの後には、NPO法人新町川を守る会の協力で、吉野川下流をボートクルーズ。台風で水かさが増した三男の勇姿を楽しんでもらいました。

※ ※ ※
河川交流がひとつの形となった兄弟縁組。これを契機に交流を深め、産業、文化などあらゆる分野で手を携えて、暴れん坊の面目躍如といきたいものです。



賞品は流域の特産品。「三郎賞の賞品はなんと金時です」と福永会長が発表すると大きな歓声があがりました

坂東太郎、筑紫次郎を訪問。フェスティバルに参加しました

三大河川の兄弟縁組締結後、初の交流として、10月13日(土)・14日(日)に茨城県取手市の小貝川で開催された「全国川サミット in 取手&小貝川フェスティバル」に有志2名が参加しました。会場ではEポート大会やアクロバット・ライディング乗馬などがにぎやかに行われていました。「三河川兄弟縁組記念交流会」には筑後川のメンバーや縁組だるまも出席。嵐の中の式典を思いおこして話は尽きませんでした。

また、10月20日(土)・21日(日)に佐賀市で開催された筑後川フェスティバルは、世界遺産フェスタ同時開催でイベントも盛りだくさん。福永会長をはじめ有志14名が参加し、恒例の「夜なべ談議」などで交流を深めました。



佐賀市東与賀町の干潟よか公園にて。ムツゴロウやシオマネキの生息する東与賀海岸を見学しました